

## フラメンコ・ダンサー、田村陽子：“フラメンコに関して、私はアーティストであって、日本人ではない”

記者：マリア・イサベル・ロドリゲス・パロップ

2015年9月6日

現代フラメンコでは“ソロンゴ”を舞台上で踊る事は珍しい。この演目はフェデリコ・ガルシア・ロルカが自身の代表的なコピュレーション“ポピュラーソング集”に収め、1931年にラ・アルヘンティニタと共に歌とピアノの為に編曲した事によって一般に知れ渡ったもの(正確にはフラメンコの曲目ではないとの見解を持つ批評家もいる)。そうです、“ソロンゴ”と言えば、熱烈な愛好家は必然的に最も有名な詩を思い浮かべるでしょう：“月は小さな井戸、花には何の値打ちもない、値打ちがあるのは夜に私を抱くあなたの腕だけ”。10月16日を境に、日本人は日本のフラメンコ・ダンサーの姿を思い浮かべるでしょう：田村陽子はダンサー兼振付家のヘスス・オルテガをはじめ、スペイン人アーティストと共に日本ツアーをスタートさせます。ソロンゴの他、今や全世界のものであるこの地のフラメンコを披露します。

--ツアーの為に‘ソロンゴ’を‘救い出した’、何故ですか？

--ヘスス・オルテガ：必要だったから救い出しました。私たちの作品、正確には田村陽子の作品ですが、‘ミラダス(視線)’と言い、舞台上でその視線が見えなければならない。パソ・ア・ドスを踊り、愛について語ります、だからこそ‘ソロンゴ’なのです。この踊りはタンゴ調又はブレリアス調で踊れますが今回私たちは独特の雰囲気を出す為ソレア・ポール・ブレリアス調で踊る事にしました。タンゴスは明るすぎますし、ブレリアスもそうです。だから落ち着かせる為にもソレア・ポール・ブレリアス調にしました。

振付はバダホスで、私の学校で(セントロ・デ・フラメンコ・イ・ダンサ・ヘスス・オルテガ)行いました。この時、コンテンポラリー・ダンサーのファン・カルロス・グアハルド氏に視線や恋人同士の愛にフォーカスを当て、体の表現や舞台上での見せ方などを協力頂きました。

--ツアーの内容は？どのように考えていますか？

--田村陽子：そうですね、東京からスタートします。そこが最初のステージです。ヘススたちはスペインを10月15日に出発、16日に日本に到着します。その瞬間から21日まで練習の日々です。22日が初舞台で、名前は‘ミラダス(視線)’。二部構成となり、第一部には群舞として3人の日本人ダンサーに協力頂きます。幕開けに全員でファンダンゴスを踊ります。ミュージシャンも全員ステージ上に登場します。第一部にはピアノは登場しません

が、第二部には出演します。ゲスト・アーティストとしてリカルド・ミーニョがスペインから来てくれるという贅沢な公演になります。日本にスペイン人ピアニストを招くのは初めての事です。

--ラ・ウニオンのカンテ・デ・ラス・ミナス・フェスティバルを訪ねた後ですので、タラントも踊るでしょうね？

--田村陽子：はい、私は今年のフェスティバル・デ・ラス・ミナスの初回日本予選でデスブランテ賞を勝ち取り、この賞へのオマージュにタラントを踊ります。そして第二部ではリカルド・ミーニョのピアノ伴奏のみでシギリージャを踊ります。ヘスス・オルテガはリカルドのピアノ、ラモン・アマドールのギター、ダビ・パロマールの歌、そしてロベルト・ハエンのパーカッション（インタビュー後パコ・ベガに変更）でファルーカを踊ります。第二部はゲスト・アーティストのリカルド・ミーニョのピアノソロ、ブレリアスで幕が開きます。そして、そこから日本全国ツアーが始まります。わくわくします！

--なぜこのツアーが企画されたのでしょうか？

--ヘスス・オルテガ：陽子と私は一緒に働き始めて4年が経ちます。スペイン人を招き日本で公演をする事がどれ程の費用がかかるか知っています。航空券、宿泊費、食費だけでも非常に高くつきます。だから陽子に日本各地の実力あるフラメンコ・ダンサーに全国（今回のツアーはダンサーたちの住む函館、東京、京都、名古屋を含む）ツアー参加を呼びかける事で経済的負担を軽減出来るのでは一と提案しました。

移動、練習、仕事の多い1カ月になると思いますが、私たちにとって1公演してスペインに帰国するのではなく、ツアーが出来る事はとても有りがたい事です。そうすればもっと働き、もっと旅し、その国をより楽しめます。その他にも、訪れる各都市で(各々の地の公演名は異なります。その地のダンサーが名前を決めます) 様々な演目の歌や踊りのワークショップを開催し、私は故郷のタンゴスとハレオを取り入れようと思います。故郷を離れる度、この地独自のものを紹介しようと心掛けています。私たちのカンテ(歌)を日本で紹介し、少しずつ知れ渡っていく事を光栄に思います。

--東京はツアーの始まりであり、終わりですよ？

--田村陽子：その通りです。東京で始まり、東京で終わります。私のアカデミー‘エストゥディオ・ラ・フエンテ’のある首都で3日間のワークショップを実施し、ツアーを終了します。ハードな日々が待っていますが、私はとても幸せです。

--ヘスス・オルテガ：又、2つの公演(京都と東京)に関してはインセンティブが付与されません。日本にはアーティストが事前に書類を作成し、その書類が審査員に渡り、公演の際に審査員も一人鑑賞するというコンクールがあります。その審査員が数多くの公演の中で最優秀作品を選びます。分かりやすく言うと、セビージャのビエナルのヒラルディージョ賞(秀でた作品におくられる賞)のようなものです。京都の公演‘コリエンテス’と陽子の公演‘ミラダス’はそのコンクールに参加する事になっています。うまく行くといいですが、きっと上手くいきます！

--陽子は‘太陽の子’と言う意味ですが、スペインから遠く離れた場所で心も体もフラメンコに捧げようと決めるにあたり、何があなたを照らし導いたのでしょうか？

--田村陽子：幼い頃から自分は踊りに向いているとわかっていました。様々な踊りを習いました、クラシック・バレエ、バトントワリング、ジャズ・ダンス、そして17歳の時にフラメンコを中井不二子やアントニオ・アロンソ、水村繁子のもとで習い、2002年に日本初のフラメンコ大使として知られている小松原庸子のスペイン舞踊研究所に入所しました”

--しかし、フラメンコに注目したのはなぜですか？

--田村陽子：日本でフラメンコの映画を見て魅了されました。母に自分はこれがやりたいんだ、と何度もねだり、母はフラメンコを教えていた友人のお教室に私を連れて行き習い始めたんです。ここから全てが始まりました。

(以降、陽子はフラメンコ及びクラシコ・エスパニョールをアントニオ・カナレスやクリージョ・デ・ボルムホスやマリベル・ガジャルドなど著名なマエストロたちに学び日本国内外の最高レベルのツアーに参加するようになった。セビージャのビエナル・デ・フラメンコではかの有名なマエストラ・サントラ・デ・ラ・サウダダの舞台に立ち、サラゴサ万博では日本デーの公演に出演を果たす。最近ではラ・ウニオン・フェスティバルで準決勝まで残った。ラ・ウニオンの舞台に共に立ち向かい、寄り添ったのは芸術監督であり振付家であるヘスス・オルテガだけではなく、誰もが知る舞踊手、クリスティナ・オヨスです。“マエストラ”とは日本でコンクールの審査員を務めた時に知り合ったという。本紙はクリスティナとコンタクトを取り、その経験をこのように話してくれました：‘感情は表に出すべきで、その感情を人々に感じさせなくてはならないと説明したのよ。その感情と腹で踊らなくちゃ、そして常にその夜が最高の夜になると思いつつ。私は陽子にとっても期待している。彼女は素晴らしい表現力を持ち、努力家だし、いつも歌とギターを気にかけている。フラメンコにすごく溶け込んでいて、観客はやっぱりそれを感じるのよ。又、ラ・ウニオン・フェスティバルに残る事は多くを知り、自分を知ってもらおう大きな一歩だと思う’)

--あなたは2012年6月より独立しましたが、何が一番大変でしたか？

--田村陽子：たぶん、新しい事へ挑戦する際に感じる恐怖を乗り越える事だと思います。舞台上、フラメンコを通して、日本とスペインではほとんど変わりはない。と言う事を理解して貰えるか、常に不安でした。よく“日本人がフラメンコを踊れるの”と聞かれますが、フラメンコに関して、私はアーティストであって、日本人ではないです。ユネスコはフラメンコを世界無形文化遺産に指定していますからこの芸術は万人のものだと思います。フラメンコを尊敬し、感じれば正にそれ、全世界のもの、我々一人一人のものです。

田村陽子は私たちの国に惚れ込み、今度はスペインが陽子の表現するフラメンコ特有の強さと繊細さが共存する感情の激流に少しづつ応えている。スペイン語がとても上手で学ぶ意欲、表現したい気持ちに満ち溢れ、アジアやメキシコで公演し、マリア・パヘス舞踊団の作品“セビージャ”の日本公演にも出演、作品“カルメン”では主役を務めた。

--田村陽子の限界はどこですか？

--田村陽子：踊り手としての限界は設けないようにしています。共有したいものを表現、それに立ち向かうだけです。誰もが心掛けるように、私も日々昇進し、周りの人々から学び、私の周りが心地良く感じられるよう頑張っています。常に良くなろうと心掛けています、みんなと同じです。

--ヘスス、田村陽の踊りをどう表現しますか？

--ヘスス・オルテガ：先ずは陽子が述べた事、日本とフラメンコについて強調させて下さい。私も我々のフラメンコが全世界のものとなり世界各地に伝わる事をとて光栄に思います。スペインから沢山の事、多くの気持ちを伝える事が出来て誇りに思います...遠く離れていながらもスペインを見つめ、観察し、恵みの水のごとく多くを吸収する国、日本でこれ程多くの事を感じているのです。それが世界的である事です。陽子の踊りはフラメンコがグローバル化された賜物だと私も思います。そして、彼女の踊りについてですか、何も言う事ないでしょう！！陽子は言い表すとしたら、非常に努力家であり、とてもいい踊りを踊っています。他の方との違いは、踊りを感じ、表現する彼女独特の手法だと思います。彼女のフラメンコはテクニックも駆使していますが、気持ちが入っているからこそ効き目があります、陽子はそれを伝える力に非常に長けています。

(この二人の偉大なアーティストに別れを告げます。ヘスス・オルテガに関しては、エクストレマドゥラを含む私たちの芸術の全てを日本で紹介するという挑戦を目前にひかえています。私は陽子の寛大さ、人間性そして私たちを理解し、自分を理解して貰う能力に驚いています。とは言え、インタビューの最中の微笑ましいエピソードがありました。彼女に“フラメンコのサルビア（本質）”についての質問した際、さりげなく辞書をひいた場面もありました。すると、日本人らしい繊細で礼儀正しく私に近づき：‘あなたの質問が理解出来ません、私の辞書にはサルビアは植物の名前としか書かれていません’と陽子は言いました。)